鈴木 健二（静岡）
協同建材(株) 営業部
〒432-8051 静岡県浜松市中央区若林町2582
TEL.(053)454-5461　FAX.(053)454-6814

力合わせて その先へ 建築資材の販売と施工で地域貢献

弊社は、昭和 22 年 (1947 年) に「やらまいか精神」の息づく浜松市で建築資材の販売と施工を目的として創立いたしました。以来、静岡県西部地域で「安全・品質・環境」の向上をモットーに、お客様のご要望に誠実に対応し、湿式建材の販売と専門工事を主軸に、建材メーカーと建設会社様の良き仲立ちとなり、微力ながら地域発展に寄与することを心掛けてきました。

現在私は、内外装の仕上げ材として、アイカ工業 (株) の「ジョリパット」工事営業をしております。ジョリパットは「美しい塗材」という意味の造語で、多種多様な表情を作り出すことから、「魔法のパテ」と言われています。豊富なパターンとカラーがあり、新築工事・改修工事どちらにも対応できる機能性を持った商品です。その下地材として、内外壁の曲面仕上げにも対応できる、吉野石膏(株)の「デラクリート」を使用しています。下地から仕上げまで、責任を持った一貫施工を行っておりますので、是非ともご採用いただければ幸いです。

弊社は、施工品質向上に努め、全社員で力を合わせ、地域の皆様に満足していただける商品や施工を提供しております。引き続きご愛顧のほどよろしくお願いいたします。

2025 NOV 11 No.446

ARCHITECT

The Japan Institute of Architects

CONTENTS

法人協力会通信 77
協同建材株式会社 ―― 表紙裏
鈴木 健二

地域会だより ―― 1

連載【隔月 全6回】東南アジア建築紀行
第4回–「ホーチミン・シティで東南アジアの新しい建築を模索する」– 2
岩元 真明

静岡発：JIA塾
リフォームでも使える左官の基本と応用 ―― 4
石川 正子

愛知発：「BIM導入と省エネ計算セミナー」開催報告
BIM×環境配慮設計でひらくGX/DXの未来 ―― 5
横関 浩

寄稿
建築保存情報の執筆を振り返り― 保存から活用へのみち 6
谷口 元

寄稿
迫り来る南海トラフ巨大地震に備えて 耐震設計を再考しよう ―― 8
渡辺 誠一

愛知発：建築ワークショップ@豊橋
第20回「お店をつくろう！」～小さなまちづくりプロジェクト 10
黒野 有一郎・野々川 光昭・関口 啓介

JIA東海支部
JIA東海支部事務局リニューアルと回顧展 ―― 11
浅井 裕雄

保存情報 第286回
太閤山 法誓寺本堂 ―― 12
中澤 賢一

編集後記 ―― 12
國分 孝雄・江川 静男

寄稿
大屋根リング／大阪ヘルスケアパビリオン ―― 13
武藤 優哉

万博が齎したもの ―― 13
高木 耕一

地域会だより 今後の予定

■JIA東海支部

・11/7～8　JIA建築家大会2025千葉
・11/18　2026年度東海支部役員選挙　立候補届出締切り

■JIA静岡地域会

・11/21　第6回役員会

■JIA愛知地域会

・毎週金曜日　JIA大学授業「建築家の仕事」2025
　～1/23まで（名古屋市立大学　芸術工学部　芸工棟M101講義室）
・11/14　2026年度愛知地域会 会長・副会長及び監査選挙 立候補・届出締切り
・11/21　第6回役員会／賛助会企業商品説明会

■JIA岐阜地域会

・11/18　第7回役員会

■JIA三重地域会

・11/15　建築ウォッチング

JIAに入会して

正会員

金子 慶一（JIA愛知）
株式会社飯島建築事務所

この度はJIAに入会させていただき、誠にありがとうございます。入会に際しご推薦くださった皆様には、心より御礼申し上げます。先日の暑気払いでは早速交流の機会をいただき、ありがとうございました。今後とも微力ながら活動に参加し、お役に立てればと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

正会員

本村 雅昭（JIA愛知）
株式会社石本建築事務所

この度、歴史あるJIAに入会させて頂きましてありがとうございます。「建築の力（可能性）を生涯探求し続けたい」という自身の思いを、多くの建築家の方々との対話や意見交換、交流の中で、違った視点からアプローチしていければと心弾みます。

皆様と時間を共有する中で東海エリアがより良いものに繋がればと思います。よろしくお願い致します。

表紙　建築の生まれるところ vol.08

ロゴデザイン・表紙デザイン　小林 ミハル（トロロスタジオ）

建築が生まれるところをテーマに写真撮影をしています。

写真　田島 ナナ
（トロロスタジオ）

東南アジア建築紀行（全6回連載）4

ホーチミン・シティで東南アジアの新しい建築を模索する

❶福岡市民フォーラムにおけるギア氏の講演の様子。筆者撮影

●ヴォ・チョン・ギアの受賞

9月上旬、ベトナムの建築家ヴォ・チョン・ギアさんが第35回福岡アジア文化賞を受賞し、来日した（**写真❶**）。1990年に創設されたこの賞は、「アジアの固有かつ多様な文化」の保存と創造に寄与した人々を顕彰するものだ。ギアさんが受賞した芸術・文化賞は、これまでにドナルド・キーンやナム・ジュン・パイク、蔡國強といった世界的な芸術家・文化人に贈られてきた。建築家が選ばれるのは珍しく、マルコス政権下のフィリピンで国家建設を担ったレアンドロ・V・ロクシン（1992年）、パキスタン初の女性建築家として歴史的建造物の修復や災害復興に力を尽くしたヤスミーン・ラリ（2016年）に続き、今回のギアさんが3人目となる。

連載の第1回でも少し触れたが、私は2011年から2015年までの約4年間、ギアさんが主宰するVTNアーキテクツ（当時はヴォ・チョン・ギア・アーキテクツ）で、パートナー兼ホーチミン事務所の所長を務めていた。今回の受賞に合わせて開かれた福岡市民フォーラムでは、当時協働したプロジェクトも紹介され、懐かしさとともに喜びを覚えた。

本稿では、現代東南アジアを代表する建築家であるヴォ・チョン・ギアさんの作品を紹介しながら、彼のパートナーとして設計に関わった経験を振り返ってみたい。

●竹でつくる建築

ギアさんのオフィスを初めて訪ねたのは2011年4月のこと。当時、彼の建築はまだ広く知られていなかったが、ホーチミン市郊外にある「ウィンド・アンド・ウォーター・カフェ」と「ウィンド・アンド・ウォーター・バー」を見て、一緒に働いてみたいと強く感じた。

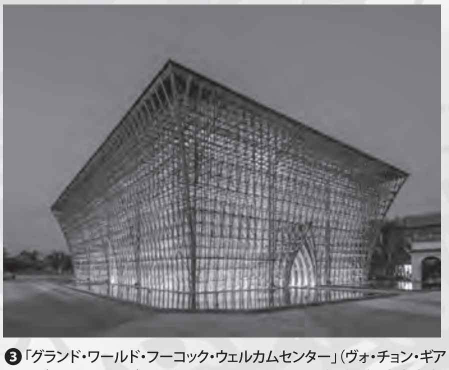
2006年に竣工した「ウィンド・アンド・ウォーター・カフェ」はギアさんのデビュー作で、人工池を取り囲む軽やかな鉄骨造の建築だ。屋根と柱にしなやかな曲線を描く竹があしらわれ、周囲のランドスケープと見事に調和していた。一方の「ウィンド・アンド・ウォーター・バー」は、彼が竹を構造材として初めて用いた建築である。天窓から光が差し込むドーム状の空間は、パンテオンのように迫力があり、また、竹という素材の温もりに満ちていた（**写真❷**）。どちらの作品も、工芸的というより構築的であり、不揃いな竹を使いながらも繊細さと大胆さを兼ね揃えていた。日本での留学経験――石川高専、名古屋工業大学、そして東京大学大学院で内藤廣氏に師事したこと――が、彼の素材への感受性と構築的なセンスを育んだのかもしれない。そんなことを思ったのをよく覚えている。

その後も、「コンツム・カフェ」（2013年竣工）や「ダイアモンド・アイランド」（2015年竣工）など、ギアさんが次々と竹構造を手がけるのを間近で見た。私自身も、服飾工場の一部をオフィスに改修する「ファクトリー・オフィス・リノベーション」（2014年竣工）において、竹による曲面天井のデザインに携わった。

そもそもギアさんが竹を使い始めた理由は、意外にも「安かったから」だという。デビュー作のカフェとバーは、自身が企画・開発したプロジェクトだった。日本留学を終え帰国した当時、仕事がなく、限られた予算のなかでどうにか建築をつくろうと考えた。その結果、竹に行き着いたのである。当時、竹は1本約1ドル。8,000本の竹で建物が建つというから、非常に経済的だった。

実は、ベトナムには竹を用いた伝統建築はあまり見られない。ギアさんは、地元クアンビン省の若者たちを集め、独自に職人組織をつくり上げ、竹の加工や施工技術を一から育てた。つまり、ギアさんの竹建築は、設計から施工まで、彼自身の創意と実践の結晶なのである。近年では、フーコック島の「ウェルカムセンター」のように複雑かつ大規模な竹構造も実現している（**写真❸**）。

❷「ウィンド・アンド・ウォーター・バー」（ヴォ・チョン・ギア／VTNアーキテクツ、2008年竣工）。大木宏之撮影、VTNアーキテクツ提供



❸「グランド・ワールド・フーコック・ウェルカムセンター」（ヴォ・チョン・ギア＋グエン・タット・ダット／VTNアーキテクツ、2021年竣工）。大木宏之撮影、VTNアーキテクツ提供

❹「ファーミング・キンダーガーデン」（ヴォ・チョン・ギア＋丹羽隆志＋岩元真明／VTNアーキテクツ、2013年竣工）。大木宏之撮影、VTNアーキテクツ提供

❺「ハウス・フォー・ツリーズ」（ヴォ・チョン・ギア＋岩元真明＋西島光輔／VTNアーキテクツ、2014年竣工）。大木宏之撮影、VTNアーキテクツ提供

❻「ベトテル・アカデミー教育センター」（ヴォ・チョン・ギア／VTNアーキテクツ、2019年竣工）。大木宏之撮影、VTNアーキテクツ提供

❼「S House 2」（ヴォ・チョン・ギア＋岩元真明＋西島光輔／VTNアーキテクツ、2014年竣工）。大木宏之撮影、VTNアーキテクツ提供

●緑とともにある建築

ギアさんの創作のもう一つの特徴は、緑と建築の融合である。その最初の試みは、彼が佐貫大輔さん、西澤俊理さん（お二人とも今ではベトナムで大活躍している）と協働した住宅「スタッキング・グリーン」（2012年竣工）。ホーチミン市内の雑然とした路地に建ち、立面にプランターを並べることによって街中に小さな森のような風景をつくり出した。

ベトナムは熱帯の豊かな自然に恵まれているが、ハノイやホーチミン市といった大都市では急激な都市化と人口集中によって緑が失われている。濁流のように道路を行き交う無数のバイクはホーチミン市の象徴的風景であり、大気汚染と交通渋滞も深刻だ。こうしたアジア大都市の過密な環境を改善しようと、ギアさんは「スタッキング・グリーン」を皮切りとして、「建築によって都市に緑を取り戻す」ことを目指した。

2010年代前半、彼は「木のための住宅」「木のための建築」を標榜し、緑化量を最大化する建築のあり方を模索していた。「ファーミング・キンダーガーデン」（**写真❹**）や「ハウス・フォー・ツリーズ」（**写真❺**）はその代表例であり、以後も「ベトテル・アカデミー教育センター」（**写真❻**）など、大規模な緑化建築を展開している。

●マインドフルな建築

もうひとつ、ギアさんとの協働で特に印象に残っているのは、メコンデルタ流域の低所得者を対象とした一連のローコスト住宅プロジェクトである（**写真❼**）。「予算4,000ドル」「耐久年数30年」といった具体的な目標を掲げ、「構造体はプレハブ、仕上げは現場生産」という明快な方針のもとに進められた。極限の条件で建築を考える経験は、何が本当に必要なのか、建築の本質とは何かを問う、貴重な機会だった。私自身、この経験から大きな影響を受け、のちの創作や研究の礎になったと感じている。

思えばギアさんは、急速に経済発展と都市化が進むベトナムで、別の生き方や価値観を模索していたのかもしれない。2014年頃から彼は瞑想に傾倒し、やがてミャンマーで修行を重ね、師範の資格まで得た。福岡アジア文化賞授賞式の数日後に京都大学で行われたレクチャーの題名は「建築と瞑想」。講演の半分ほどが瞑想体験にあてられ、参加者を驚かせていた。現在、VTNアーキテクツの全スタッフは1日2時間ほど瞑想を実践し、マインドフルな姿勢で創作に取り組んでいるという。

竹の建築も、緑の建築も、ローコスト住宅の試みも、いずれも急成長する社会への問いかけであり、オルタナティブな創作のかたちといえる。瞑想という静かな実践を手にしたギアさんが、これからどのように「マインドフルな建築」を展開していくのか。期待を込めて見守りたい。

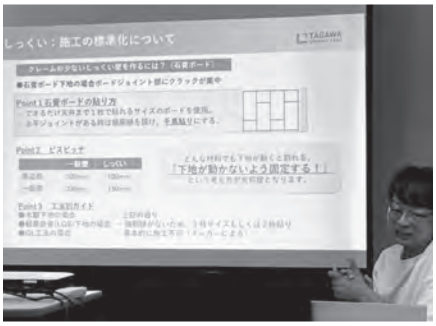
建築家
岩元真明 いわもと まさあき
九州大学准教授、博士（工学）

建築家、九州大学准教授、博士（工学）。
2008年東京大学大学院修士課程修了後、難波和彦+界工作舎に入社。
2011年～15年にヴォ・チョン・ギア・アーキテクツ（現VTNアーキテクツ）のパートナー兼ホーチミン事務所所長。2015年よりICADA共同主宰。
首都大学東京特任助教、九州大学助教を経て、2024年より現職。近刊に『ヴァン・モリヴァン――激動のカンボジアを生きた建築家（西山夘三記念叢書 1）』（millegraph、2025）

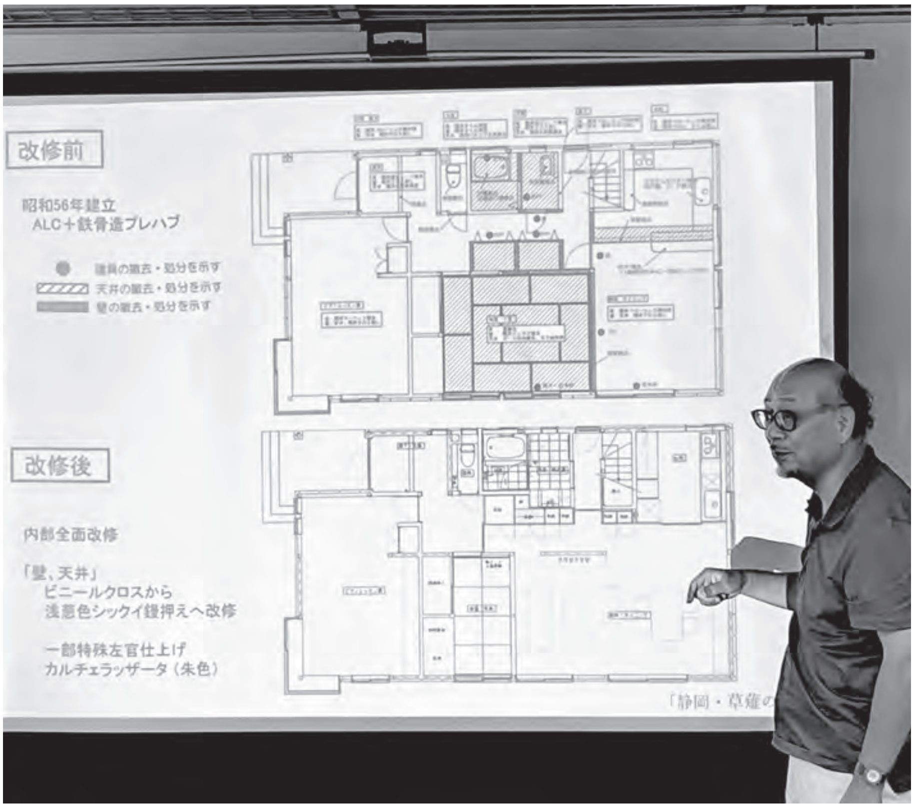
リフォームでも使える左官の基本と応用

●開催日：2025年8月6日（水）　●会場：静岡市ペガサート6階 演習室

左官の実演　静岡県左官業組合 ハマニ（株）河合滋氏



左官材料の取り扱いの注意点　田川産業（株）木川真一氏



基調講演　建築家 薩田 英男先生

8月6日にJIA塾「リフォームでも使える左官の基本と応用」が開催されました。

初めに左官職人、静岡県左官業組合 ハマ二（株）の河合滋さんからは改修工事、公共工事での左官を元に基本的な説明から技術的な内容までお話を頂きました。話の中では漆喰仕上げと土壁仕上げの実演も行われ、話と視覚から得られる内容は分かりやすかったです。また、なぜこの2つ（漆喰仕上げと土壁仕上げ）の実演を行うかの説明では、漆喰仕上げは平成30年度の公共建築工事標準仕様書に約50年ぶりに復活し、令和4年度の公共建築工事標準仕様書に下地石膏ボートが追加され、令和7年度の公共建築工事標準仕様書では押え仕上げが追加されたとのこと、土壁仕上げは令和4年に不燃材料として告示追加されたとの説明がありました。正直にいうと知らなかった内容だったので、勉強になりました。その他にも、コテの使い方等技術的なお話や腕の良い職人の方の見分け方、大きな壁の塗り方、施工時に気を付ける点など、普段直接聞くことのできないことも含め、お話を聞くことが出来ました。

次に建築家　薩田英男先生のお話も左官仕上げのおもしろさを感じる内容でした。住宅や改修時にどのような部分に左官壁を採用したかなどを実例を交えながらお話頂きました。色漆喰を使った壁のポイントや、左官壁を使用した空間の話や渡辺真左志氏のお話は刺激なると共に漆喰の奥深さを感じました。

最後に左官建材の田川産業（株）木川さんによる材料、技術的なお話では漆喰と珪藻土の違いなど、素材それぞれの特徴交えたお話や、法的な告示と不燃認定番号の取得、石膏ボード下地を採用する際の注意点などのお話を聞くことが出来ました。また今回、商品として中塗土の神来土や現代しっくいのLimore、DIY用のNIRI2のご紹介もありました。

今回のJIA塾では、左官について気を付ける点、現場で私たちが確認するべきポイント等も学ぶだけでなく、角度の違う様々方向から左官について勉強することが出来、左官の今後の可能性、広がりを感じる内容だったと思います。また、今回のハマ二（株）の河合滋氏さんと一緒に、実演を行う職人として20代の若い職人の方とインターンの大学生の方が一緒に来ていました。左官職人は年齢層も上がっていると以前現場監督に聞いていたので、このような若い職人の方々に出会える機会が増えるとうれしいです。現在、自然素材の高まりから注目を浴びているという漆喰、土壁。今まで金額的な面から限られた範囲でしか採用したことがなかった左官仕上げですが、設計当初からお客様に提案し、採用する機会を増やしていきたいと感じました。

石川 正子（JIA静岡）
石川正子設計室

BIM×環境配慮設計でひらくGX/DXの未来

●開催日：2025年8月6日（水）　●会場：JIA愛知 支部会議室

公益社団法人日本建築家協会　東海支部愛知地域会（JIA愛知）は、8月6日(水)JIA愛知支部会議室にて「BIM導入と省エネ計算セミナー（非住宅RC編）」を開催しました。私は講師として登壇し、BIMによる業務効率化や環境配慮設計の実務的効果、そして国が推進するGX/DX施策の最新動向について解説を行いました。当日は設計者・技術者の方々にご参加いただき、多くの関心が寄せられました。

1. BIMがもたらす効率化と高品質化

BIM（Building Information Modeling）は、設計業務に効率化と高品質化をもたらす技術です。設計図面の自動生成・自動修正、干渉チェック、数量拾いなどの具体的な事例を交えて紹介。これらの機能により齟齬が発生しにくくなり、手戻りを減らして作業期間を短縮できます。さらに、省エネ計算や環境シミュレーションを容易に行えるようになることで、環境性能の向上にも寄与します。これらの仕組みは、国が推進するDX/GX戦略とも合致しています。

2. カーボンニュートラルの潮流とBEI･LCA

2050年カーボンニュートラルの実現に向け、建築業界では運用時だけでなく、建設資材に内包されたCO_2排出量（エンボディドカーボン）の削減にも取り組む必要があります。BEI（Building Energy Index）とLCA（Life Cycle Assessment）の基本的な考え方を解説し、両者をBIM上で統合的に扱う意義を示しました。BEIは設計段階からの基準適合を数値で確認でき、LCAは建物のライフサイクル全体を通じた環境負荷を把握できる手法です。BIMを活用することで、低炭素な意思決定を短期間で内製的に行うことが可能になります。

3. 数秒でBEIとLCA――Vectorworks用プラグインの実演

後半では、株式会社フローワークスが開発したVectorworks用BEI/LCA算定プラグインを用いた実演を行いました。このプラグインは、BIMモデルから数秒でBEIとLCAを自動算定し、レポートまで生成できるものです。モデル内の外皮仕様や設備性能を読み取り、一次エネルギー消費量とCO_2排出量を即座に可視化する様子を紹介しました。参加者の皆様からは、設計段階で環境性能をリアルタイムに検証できる可能性に高い関心が寄せられました。

4. 「補助金で始める」現実解

BIM導入費の1/2を支援する国交省「建築GX･DX推進事業」や、研修費を最大75%まで支援する経産省「リスキリング支援補助金」についても説明しました。これらの制度を活用することで、導入から人材育成･運用まで、経費を抑えながら段階的に進めることができます。LCA算定人件費が全額補助となるケースもあり、中小規模の設計事務所でも環境配慮型設計への取り組みがより現実的になっています。また、申請プロセスを実務的な観点から整理し、導入の第一歩を踏み出す方法を紹介しました。

5. 建築界のGX/DX実装に向けて

今後、BIMは建築の社会的責任を果たすための情報基盤へと進化していきます。私は、環境性能を可視化しながら設計を進める文化を広げることが、これからの建築家のひとつの使命であると考えています。環境配慮設計はもはや特別な試みではなく、社会に応えるための基本姿勢です。今回のセミナーが、BIM×環境設計の新しい潮流となるきっかけになることを期待しています。

横関 浩（JIA愛知）
スタンズアーキテクツ
フローワークス

寄稿　建築保存情報の執筆を振り返り

旧愛知県文化会館（1978 年東海現代建築研究会発行「東海建築譜」より抜粋）

旧大和生命ビル（旧名古屋日本徴兵館）

名古屋市演劇練習館「アクテノン」（旧稲葉地配水塔、旧中村図書館）

愛知県立医学専門学校・県立愛知病院門扉

名古屋大学 豊田講堂

はじめに

編集諸氏から Architect 11 月号の頁の穴埋めに「（仮）中国の建築保存と再生」というテーマで寄稿依頼がありました。彼の国では興味深い動きがあり、着目しているのですが執筆に足る情報収集がはかばかしくないため、報告はまたの機会にすることにしました。かわりに標記の題目で寄稿することに相成りました。いささか私小説風になったことをお許しください。

1 幼き頃のあこがれ：モダニズム建築

私の幼いころ、家の周辺は空襲で破壊され放置された工場跡地群のほか、粗末な家並と田畑が拡がり、遠い南の丘の上に旧地方裁判所（現市政資料館）がそびえているのが印象的でした。時々家族で出かけた名古屋の中心部には、昔ながらのデザインの県庁や市役所、松坂屋百貨店などがありましたが、やがて旧愛知県文化会館とか旧 NHK など目の覚めるような、新しい時代の到来を表現したモダニズム建築が次々と生み出され、その姿に強い憧れを抱いたのが、建築界に進む動機の一つでした。

2 既存（有名）建築の喪失

学生時代には、雑誌や書籍に掲載された建築、師匠や先輩たちがリストアップしてくれた建築などを求め、各地の建築群を観て廻ることは、皆さんの多くも経験されたことでしょう。しかし歳を重ねるにつれ、それらの多くが、老朽・狭あいなどの理由のもとに解体され、新たに建て替えられたり失われたりしている状況にあります。建築を学ぶ若手が参照し憧れてきた先達の作品群がこの世界から無くなりつつあるのです。

雑誌 ARCHITECT に「保存情報」の連載が始まり、筆者も分担執筆者の一人に加わって以来、やがて失われていくであろう「モダニズム建築」に多く焦点を当ててきました。（筆者の執筆リストを参照されたい）

3 消費型社会に生きる：我々が作ってきた建築・都市の喪失

嘆かわしくも、筆者が関与してきた病院などの建築作品も次々と無くなっている状況を自ら目撃しながら、生涯を終えなければならない時期を迎えています。今を生きる我々の時代の人々は、沢山設計し建設してきたが、何も遺さなかった世代であると、後の時代の人々に言われかねません。消費型社会の先兵として、つくり続け、壊し続けてきたのです。

これはあたかも鴨長明による「方丈記」に記されている、「行く川の流れは絶えずして……」、現世はうたかたの「仮の宿り」であるという、日本人の無常観が投影されているのでしょうか？

4 行政側の変化 1：スクラップ・アンド・ビルドからの脱却

若い頃から、大学の施設整備に関与することが多かったのですが、2001 年文部科学省から発表された「国立大学等施設緊急整備 5 か年計画」によって状況が一変しました。先端的な研究拠点に限定して整備を進めるという大方針でした。狭隘化解消のために必要面積から現有面積を差し引いて整備面積を決めるというもので、要は既存の建て替えは認めず、耐震と機能改修が原則となりました。名古屋大

― 保存から活用へのみち

神言神学院

名古屋大学 古川記念館（旧古川図書館）

名古屋大学 音楽練習施設 (旧宇宙線望遠鏡室)

筆者が執筆した施設一覧（掲載回：2002 ～ 2025 年　）

掲載回	［掲載タイトル］
12	愛知県立医学専門学校　県立愛知病院門扉：登録文化財
25	デイサービスセンター松岡大正庵（旧松岡旅館）：消失
38	旧大和生命ビル（旧名古屋日本徴兵館）：消失
52	愛知懸信用組合聯合会館（現愛知県庁大津橋分室、旧愛知県労政事務所、旧農林会館）
61	向野跨線橋
75	名古屋市演劇練習館「アクテノン」（旧稲葉地配水塔、旧中村図書館）
85	石原邸　＜林廣伸氏執筆＞：登録文化財・消失
89	中島邸（旧可知家住宅御主屋）
100	名古屋大学　豊田講堂　：登録文化財
111	名古屋大学古川記念館（旧古川図書館）
118	神言神学院
129	稲沢市庁舎
139	神谷家住宅茶室：登録文化財（孤・柏露軒・腰掛待合・中潜門）
152	名古屋センタービル本館
164	名古屋商工会議所ビルディング
175	モダニズム建築としての名古屋城天守閣
193	名古屋大学　旧宇宙線望遠鏡室　現音楽練習施設
204	旧三菱重工業名古屋製作所本館：消失（名古屋大学大幸団地内旧校舎）
216	名古屋大学医学部図書館
236	名古屋大学東山キャンパスのグリーンベルト
256	児子八幡社
277	中産連ビル本館

学においても、ノーベル賞記念など特別な研究拠点施設のみ新築で、多くは既存の改修が大原則となりました。なかには戦後間もなく建設された古い建物もあり、この政策以降、皮肉にも解体と喪失に加担しないで済んできたわけです。

5 行政側の変化 2：文化財の保存から活用へ

1950 年に制定された「文化財保護法」は、もとよりそれらの「保存と活用」が当初からうたわれていましたが、2019 年の改正により「活用しながら保存」という方向に大きく舵が切られました。おそらく保存重視の姿勢に傾いた状況では、文化財の減少傾向に歯止めがかからないという危機感故の改革であったのでしょう。そしてその具体的な方策として挙げられたのが「文化財保存活用地域計画」でして、今や各地で策定が進められています。この計画は文化財という点的価値に着目するにとどまらず、街道筋などの線的展開、地域の街並み全体に拡がる面的展開にまで企図しているようであります。

さてその一方で、残念な事案も続いています。例えば林廣伸先輩と筆者が改修に関与した石原家住宅（1936 年 /2008 年改修登録有形文化財（建造物）23-0337）の例ですが、所有者の没後、遠隔に住む遺族がその維持管理に苦労し、誰か自分に代わって保存しながら有効活用して貰える相手を探していました。今年の夏日本の家の取得を希望する外国人を現地に案内したところ、知らぬ間に更地に変貌しており、衝撃と無力感に苛まれました。遺族が思い出の詰まった住宅を手放す事態となり、そして街の記憶がまた消失してしまったのです。

6「保存情報」・「保存研究会」の役割を「活用」に換えていくべき

2000 年に発足した愛知地域会の保存研究会は、当初は「持続可能な社会の模索」という状況下で、設計技術者として「保存にかかわる見識と技術」を追求し、そのための「研究と研鑽」を主目的としていました。（保存情報 I より抜粋して引用）

機関誌 ARCHITECT に掲載されてきた約 300 回に及ぶ「保存情報」の取材記事は、「登録有形文化財」と「データ発掘：お気に入りの歴史的環境調査」の 2 種類があることはご存じのとおりです。

研究と研鑽、文化財への取材、発掘というアクションは、確かに重要な姿勢ではありますが、建築家という職能（を発揮すべき）集団として、「見識と技術」を「保存」段階にとどめず、更に「活用」段階にまで発揮していくべき時代が到来しつつあるのではないでしょうか？

設計条件は依頼主から提示されるのが前提で、その条件を満たすための設計業務をなすという、従来型の受動的な姿勢のままでいて良いのかという疑問もあります。「模索」ではなく「持続可能な社会の構築」に貢献する、能動的な職能集団を目指すべきだと考えています。

谷口　元（JIA愛知）

寄稿

迫り来る南海トラフ巨大地震に備えて耐震設計を再考しよう

今、話題の南海トラフ巨大地震は、政府が13年ぶりに見直し、新たな被害想定を今年 3/31 に公表した。この30年間に起きる確率が 2025 年1月1日時点の70％から80％に引き上げられた。南海トラフ巨大地震とは、100～150年に1回の間隔で発生している太平洋に面する海洋型の巨大地震で、規模はマグニチュード M8.0～9.1と予想されている。内閣府有識者会議の想定域は、国が2003年に出した従来の想定より**図ー1**の太線ように拡大され、地震規模も M8.8 ⇒M9.1として、国や自治体に見直しを求めている。この震災の見直しでは、東日本大震災と同じマグニチュード９クラスの地震が発生すると、住宅の耐震化や津波避難施設の整備がすすみ被害が抑えられる一方、最新の地形・地盤データーを反映させたことによる浸水域が拡大した結果、2012～2013に想定した死者数約32万3000人が約29万8000人程度になり（約2万5000人減）、経済的な被害・影響額は237兆2000億から物価高を背景に292兆2000億円（55兆円増）にアップした。政府は夏頃までに対策推進基本計画を見直すという。

図ー1 想定南海トラフ巨大地震域の拡大

さて、日本の建築の設計法は、1920年に市街地建築物法に始まり、1923年の関東大震災を機に耐震設計などが見直され、1960年に建築基準法が制定された。その後の建物デザインの変化に伴い、建物の地震被害が多く見られ（例えば、十勝沖地震1968年、震度5、M7.9鉄筋コンクリート校舎の柱（短柱）の剪断破壊）それらの検証、知見を元に法規は補強されたが、1980年に大幅に改正され（1981年施行）新耐震設計として建築基準法が改正され、今日に至っている。（木造住宅については2000年にも改正強化された）**図ー2**参照、矢印の幅が大きくなっているのは法規制がより厳しくなっていることを示す。

図ー2 耐震規定の変遷

そこで、現行法規の耐震性はどのようなものかを再チェックしておかなければならない。巨大地震の震度6強7以上の地震が起きた後、建物はどのような状態なのかである。

その前に建物の耐震性の考え方として、①耐力壁の多い強度型の骨組み（大地震でも何ら損傷しないタイプ）、②柱と梁だけの骨組み：ラーメン構造（梁端部に損傷が起きるが倒壊しない粘りタイプ）及び③柱と梁と多少の耐力壁がある①と②の中間型の 3 種類がある。日本の耐震性の目標は経済性、建物の存続期間などを元に、次のように決められている。即ち、頻繁に起きる震度5以下の中小地震では、建物はほとんど損傷しないこと。100～150年に1度起きる巨大地震、震度6強7では建物に大きな損傷を許容するが倒壊・転倒は起こさせないと云うのが耐震目標であることからミニマムの法律である。よってこの建築基準法に定める耐震性のある建物とは、どのような地震にも耐えて、建物が使用できるとは限らない。建物によっては地震後、そのまま使用できず、かなりの補修が必要な場合や、使用不可で建て直さなければならないものがある。そのことを国民は知っておく必要ある。

ではどのように対応をすればよいか。それは建築に際し、建物の性能設計として耐震強度を現行の法規以上に割り増しを設定することである。

戸建て住宅の設計では品確法（住宅品質確保促進法）で耐震等級を等級1（1.0倍）、等級2（1.25 倍）、等級3（1.5倍）があり、そのグレードは建築主が決めることになっている。等級1は建築基準法そのものあり、等級3では地震力を1.5倍に割増しすることから、大地震でも損傷はほとんど起きないグレードである。しかし、高層のマンションはこのような品確法は適用されない。建築家、構造設計者は設計に当たり、日本の耐震規定を建築主に説明し、設計しようとする建物の大地震後の状態を了承の上設計すべきである。地震後こんなはずではなかったと云われないような設計が重要である。迫り来る南海トラフ地震に対し、今、現行基準法ギリギリの設計で建物を建てたとして、数年以内に倒壊はしないものの、建替えざるを得ないような大被害を受けたとき、建築主は設計者に対して何と言うだろうか。おそらく、なぜ巨大地震が迫っているのに、それに対応した強い建物を設計しないのかと。少なくとも初期投資として構造強度をあげて置けば損害は少なくなるはずだ。構造費は建築全体の約40％と云われている。構造費の地震地力による増額は40％のうちの30％ぐらいであろうから、地震力を1.25倍にアップして設計しても、工事全体では約1.05程度ではないだろうか。その程度で大地震に対して相当安全な建物が出来るのである。

以下に阪神・淡路大震災の事例を示そう。耐震規定が改定されたのが1981年、阪神震災は1995年1月だから、14年後のこと、神戸市には新耐震と旧耐震設計の建物が混在していた。マグニチュード 7.3 震度 7 の地震により旧耐震規準の木造住宅は将棋倒となった地域がある。**写真ー1**

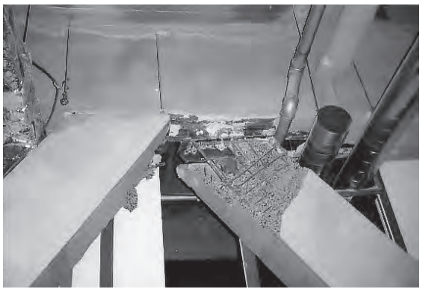
写真ー1 東灘区の木造住宅の倒壊

旧耐震では建物の中間階の崩壊、建物の転倒、鉄骨造の溶接破談など今までに経験のない被害が続出した。**写真ー2、ー3**

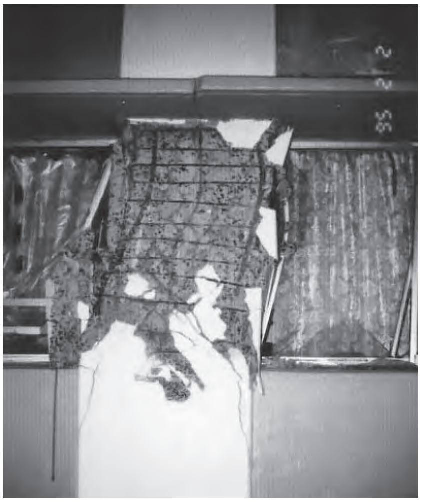
写真ー２ 旧耐震基準によるビルの転倒、鉄筋コンクリート６階建ダイエービルの崩壊。

写真ー３ 神戸市庁舎は旧耐震基準による鉄筋コンクリート８階建（地下１階）、その６階が層崩壊したが、新館は鉄骨造の超高層ビルは無被害であった。（設計は大臣特認による高度な設計）

一方、新耐震設計による建物でも筋交いの破壊、柱と梁端部にヒンジが発生し(新耐震基準想定どおりの損傷)など被害が起きた。**写真ー４、ー５**



写真ー4 新耐震設計の建物被害、左上から：壁のずれ(打継ぎ面の施工不良？)、中：柱と梁の接合損傷(梁上フランジ破断によるヒンジ)、1階の筋交の破壊、などは大地震での基準法どおりの被害である。



写真ー５ 新耐震設計による深江にある高層 RC 市営住宅は柱のせん断損傷、建物の倒壊はないことから耐震規定による耐震性はあったことになる。しかし補修には時間と補修費がかかる。分譲マンショだとすると、住人は耐震住宅と理解できるだろうか。

しかし、この巨大地震でも被害のない建物がある。**写真ー６、ー７**、小生が構造総括として所属したＩ設計事務所が設計監理した建物（新耐震設計）で、大手のゼネコンが施工したものである。この銀行支店は三宮駅前にあり、神戸で、一番最初に営業したとのことで感謝された。これらは余力を見込んだ構造設計としており、施工も良好であったためと思われる。このように僅かの耐震設計の配慮が大地震での命運を分けることになるのである。よって既存不適格建物の耐震補強についても、差し迫る大地震に対し、耐えられる余力のある補強が望まれる。

建築確認検査機関で審査している立場からみると、この地区で地震力の割り増しを、設計方針に掲げた設計は極めて少ない。RC 高層マンションなど、ほとんどが基準法ギリギリの設計であることに疑問を持つのである。

しかし、静岡県は東海地震に備えて、以前から地震力を1.2倍に割り増しすることを内規としており、注目に値する。

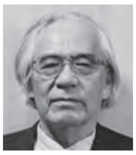
写真ー6 無被害の鉄筋コンクリート ６ 階建ての東邦レーヨン深江社宅、しかし、付近には大きな損壊した建物や道路の被害多く見られた。

写真ー7 無被害のSRC4階建て三宮駅前の銀行支店、しかし、室内の家具は散乱していた。（SRC としたのは平面が不整形で柱間が大きいことによる）

結論　建築家及び構造設計者は迫り来る南海トラフ巨大地震に対し、建築基準法はミニマム規定であることを再認識して、余裕のある耐震設計とする必要があるのではないだろうか。以上

追記：政府の地震調査委員会は、今後 30 年以内の南海トラフ巨大地震の発生確率は「80% 程度」としていたが、9月29日に、計算モデルの不確実性を考慮して「60%～90%程度以上」とする。と新たな発表があり、表現が変わりました。(「90%程度以上」とは「94.5%以上の確率で発生する可能性」を示す)

渡辺 誠一（JIA愛知）
CI東海顧問
椙山女学園大学名誉教授
元伊藤建築設計事務所
常務取締役（技術総括）



第20回「お店をつくろう!」～小さなまちづくりプロジェクト

●開催日：2025年8月29～31日

豊橋での建築ワークショップ「お店をつくろう!」。まちなかの2つの小学校を対象に20回目の開催となりました。JIA愛知の建築家も事前授業に参加、昨年出来なかった表彰式で「JIAこどもけんちくか賞」5点を選びました。（JIA愛知まちづくりWG　黒野 有一郎）

表彰式風景

おいしいしあわせカフェ

ねこカフェ

ねっこマルシェ

幸せになるお花屋さん

収穫体験のできる八百屋

表彰式は豊橋の風物詩

こども達が制作した店は、環境に配慮したもの、地域性を反映したもの、独自の発想を貫いたものなど多彩であり、材料や色彩の扱いにも工夫が見られ、その想像力と感性には驚かされる。その中から、こどもけんちくか賞は「美しく個性的なデザイン」「人を幸せな気持ちにするアイデア」「確かな構造」を基準に選考した。表彰式では、豊橋市、芸術劇場プラット、画家、商店街などから約30作品が選ばれた。三世代での参加も多く、受賞者や作品にスポットライトが当たる演出もあって、みな恥ずかしさや喜び、誇らしさが入り混じった表情を見せ、会場は終始、温かな雰囲気に包まれていた。小学校、市、会場、商店街をはじめ地域の多様な関係者が協力し継続されてきたこのワークショップは、地域協働の実践の場であり、夏休み最後の風物詩として確かに定着している。こども達にとっては、自らの地域やまちづくりに触れ考える貴重な機会となっている。表彰式に参加してあらためて実感した。

野々川 光昭（JIA愛知）
オウ環境設計事務所

いま無いものを創る力

「お店をつくろう!」は豊橋市のまちなかの小学生児童の絵画や工作の作品である。既存の社会やシステムにとらわれない自由な発想が目を引いた。サラリーマンを着地点にしないテーマが、着想に火をつけ、構築を醸成させている。既知の世界にしがみつかずに児童は新しい概念を店先に並べ、新しい世界観を展開し築こうとしている。こどもたちの未来は明るい。

関口 啓介（JIA愛知）
人建築事務所

JIA東海支部事務局リニューアルと回顧展

はじまり

いつのまにか、荷物であふれ、役員会においても移動するのに一苦労。互いに詮索しない荷物は、そのまま放置されていく。そんな状況を支部長という立場で見ていると始末しなくてはと思った。その頃、支部の財政を見つめ直しているときでもあった。

まずは、そこにある物をすべて広げ、見える化することから始めた。これは財政を見直すプロセスと同じで。広げてみると、あるべき場所が自ずと見える。「数年間広げていないものは処分する」という方針を立て、書棚をすべて撤去することから着手した。結果として、事務局は広々としたフレキシブルなスペースに生まれ変わり、年間約280万円の家賃を支払っているこの場所を、単なる物置ではなく、会員のための有効な空間として活用していきたいと考える 。

なくならない時間の蓄積

1987年旧建築家協会が発足し38年。その歴史を物語る「JAAnews」、役員会の音声テープ、整理されていない多くの写真など、知らない建築家協会がそこにある。私にとって大学時代のことだ。

残されているオープンリールテープはさすがに、再生機はないが、カセットレコーダーは手に入ったので、いくつか再生してみると、なんと愛知部会（現在は愛知地域会）の発足会の音声だった。当時の方々の言葉遣いから伝わる振る舞いや、その場の緊張感に、時間を超えた感動を覚えた。

回顧展「しまってあったモノ展」では、そのようなメディアや写真、書籍、珍しいものでは、だるまや置物といったユニークな品々までを一堂に展示し、先輩方から当時の思い出を伺うことで、そこにあるモノが持つ時間の蓄積を実感した 。

残された記憶

残された音声の多くは、議事録作成のために録音されたものと思われる。しかし、文字化された記録以上に、そこにある声や間合いは、当時の議論の熱量を生々しく伝えてくれており「記録を残す」という行為が、単なる事実の固定ではなく、正確な情報を共有し、未来へつなごうとする行為で、当時最良のメディアが使われていた。これらの記録は、残すことで、未来にいいことをもたらすのではないだろうか。

寄附行為から考える「JIAへの思い」

今回の事務局改装は、多くの方々のご協力で実現できました。賛助会の皆様からは材料の提供や什器を手配いただき、委員会の皆様には膨大な書類の整理にご協力いただきました。そして、会員の皆様からは60万円を超える多大なご寄付を賜り。この場を借りて、心より御礼申し上げます。

JIAの活動は、会員の協力金などによって支えられている。2023年のデータでは、会員が支払う支部事業協力金は約80万円にのぼり、事業の企画や運営をしながら、運営費の一部を負担していることになる。すこし矛盾を感じているが、主体的に事業を作り運営できるための参加費と思えば納得もいく。

今回の事務局改装で集まった寄付金は60万円を超える。協力金も寄付金も、さらに活動の主体者になることも「JIAへの思い」である。

その思いは、会歴や年齢、JIAに求めるものの違いによって、多様な形をとるのだと思う。

支部の未来へ

会員数が減少していく時代において、「顔の見える会」となれる。多すぎる活動は難しいが、JIAらしい活動は続けていける。

現在、支部ホームページのリニューアルを進めている。その目的は、各地域会の活動情報を誰もがフラットに閲覧できるようにし、地域を超えて活動に参加を促したい。

それぞれの地域が持つ特徴的な活動を尊重し、それらが相互に作用しあうことで、支部全体としての一体感と新しい関係性を生み出していく。支部事務局は、そのためのプラットフォームでありたいと思う。

浅井 裕雄（JIA愛知）
JIA東海支部長

保存情報 第286回 登録有形文化財 太閤山 法誓寺本堂

山門からの全景

本堂向拝

1859年竣工当時の鬼瓦

太閤山 法誓寺は八百津町にある久多見山（砥山685m）のふもと、久多見（標高500m）の街並みのほぼ中心に位置します。久多見は大宝2（702）年に山道が開通し、以来、山間の集落として発展したそうですが、現在も久多見へは山道を越えてようやくたどり着くことができます。法誓寺は真宗大谷派の寺院として一世　慶円により嘉永元（1848）年に着工、12年の歳月を経て、安政6（1859）年に本堂が竣工しましたが、当時の本堂は七間（12.74m）四面の規模で現在の半分ほどの大きさだったようです。その後、元禄年間に焼失。二世 慶伝が仮本堂、三世 慶友が享保6（1721）年に山門、四世 是慶が延享3（1746）年に鐘楼を続けて建設。六世 俊霊が本堂再建を企画し、七世 霊誠の時、桁行26m梁間25mに及ぶ大規模な本堂が再建されました。本堂は久多見山を背に東面して建つ入母屋造桟瓦葺で、正面に三間向拝を付け、さらに正・側面に広縁と落縁が設けられています。特に向拝の各虹梁や斗供等各部の装飾は精緻で、懐の深い空間と相まってとても見応えがあります。さらに明治37（1904）年十世 詮順の時、太鼓堂が建設されました。本堂が平成20（2008）年登録有形文化財に指定され、平成22（2010）年3月に本堂の修復工事が完了しましたが、鐘楼と太鼓堂の間には1859年竣工当時の鬼瓦が展示されています。本堂内部は外陣と矢来内、内陣からなる浄土真宗独特の平面で、外陣は小組格天井で構成され、向拝に続いて勇壮な空間となっていますが、内壁は本堂修復時の寄付者名札で埋め尽くされています。江戸時代から山村民の協力を得て少しずつ伽藍が形成された経緯からも、久田見の人々にとって当寺がいかに大切な存在であるかを窺い知ることができます。

【概　要】

所 在 地　岐阜県加茂郡八百津町久田見 2757
創　　建　安政6（1859）年
構造規模　木造平屋建、瓦葺
建築面積　819㎡
登 録 年　平成 20（2008）年
登録番号　21-0165
アクセス　東海環状自動車道 可児御嵩 IC から車で 30 分
　JR 高山本線 白川口駅から徒歩 140 分（6km）

中澤 賢一（JIA愛知）
堀内建築研究所

編集後記

●「いのち輝く未来社会のデザイン」をメインテーマの大阪関西万博、10月13日で閉幕した。「自然の叡智」をメインテーマに開催された愛知万博は9月25日に閉幕20周年を迎えた。

愛知万博は当時、国家的プロジェクトであった中部新国際空港（実現）、第二東名・名神高速道路（実現）、中央リニア新幹線（工事中）、東部丘陵研究学園都市構想（断念）推進の起爆剤として誘致された。当初の計画では「海上の森」を含めた東部丘陵地帯が会場として計画されていた。

誘致反対の市民活動が始まった。「海上の森」でのオオタカの出現により会場計画は格好の反対運動の標的にもなった。賛成派、反対派の市民運動も過熱し、毎日のようにマスコミを賑わせた。

結果、学識経験者を含めた「愛知万博検討会議」での合意を経て市民参加が実現した。果たして、大阪関西万博は未来社会に対して具体的に何を残してくれるのでしょうか？　（國分 孝雄）

●今年5月号から、連載が始まりました「東南アジア建築紀行」ですが、隣国でありながら触れる機会のあまりない私としては、初回から毎号楽しみに読ませていただいています。ホーチミン・シティで活躍されるベトナム建築家の優雅な作品が紹介され、その雄大な曲線美は竹を構造材としたものであることに驚かされました。東南アジアの建築家たちは、西洋の理論を独自に進化させ現実的な判断を積み重ね、風土の気候環境に建築を構築させてきているようで、力強さを感じます。

また、豊橋で小学生を対象に20回目の開催となる、建築ワークショップ「お店をつくろう」では、小学校をはじめ、地域の多様な関係者が協力のもとに長い間継続されてきたプロジェクトであること、まさに感動に値します。子供たちが独自の発想で目を輝かせ、まちづくりに触れる機会となる素晴らしい企画ではないでしょうか。　（江川 静男）

ARCHITECT
第446号
発　行　日　2025.11.1（毎月1回発行）
発行責任者　浅井裕雄
編集責任者　東福大輔
編　　　集　東海支部会報委員会
　愛知地域会広報委員会
　株式会社イヅミ内
　ARCHITECT 編集部
　岡崎市明大寺町荒井10番地
　TEL（0564）21-2657　FAX 26-1792
発　行　所　（公社）日本建築家協会東海支部
　名古屋市中区栄 4-3-26　昭和ビル
　TEL（052）263-4636　FAX 251-8495
　E-Mail：shibu@jia-tokai.org
　http：//www.jia-tokai.org/

写真撮影：楠瀬友将

大屋根リング／大阪ヘルスケアパビリオン

大屋根リングは、2025年大阪・関西万博における会場全体の主要動線であり、会場のデザインコンセプト「多様でありながら、ひとつ」を体現した世界最大の木造建築である。来場者を日差しや雨天から守る大屋根としての機能に加え、地上部の「グラウンドウォーク」と屋上部の「スカイウォーク」において、様々な過ごし方や豊かな空間体験をもたらすことができるような計画とした。また日本の木文化を表象する柱・梁や貫接合を最先端の木造技術でアップデートさせ「つくりやすく、リユースしやすい」架構形式により実現することで、都市木造化の促進や循環型社会の貢献に繋がる建築を日本から世界に発信することを目指している。

大阪ヘルスケアパビリオンは、大阪府・大阪市が産学官民一体となって出展するパビリオンである。「REBORN」というメインテーマのもと、開催都市にふさわしい、SDGs・脱炭素社会の実現に向けた次世代の環境共生建築を目指した。「木」と「水」に支えられ発展してきた「水都大阪」の文化・歴史を踏まえて木と水を再構築して作られた建築は、大阪の魅力や成長を世界へ向けて発信する新たなランドマークとなる。ひとつとして同じ形がない膜屋根は、多様な個性が集まる大阪を体現している。屋根の上には循環させた水を流し、屋根全体を包む「ウォーターベール」を創出する。水は屋根から水盤に流れ落ち、濾過を経て再度屋根から流れる循環型システムを構築している。内外装には大阪府内産材のヒノキを使用しており、中央のアトリウムには穏やかな光が木漏れ日のように降り注ぎ、木の温かみ・香りに包まれた憩いと安らぎのシンボル空間を実現した。

2つの建築は日本、あるいは大阪が持つ歴史・文化を踏襲し、現代の技術を用いてアップデートしている点では共通しているが、対照的な点もある。前者は規格化や汎用化を見据えているのに対し、後者は建築の可能性を拡げ、挑戦的でより魅力的な空間創出を目指した。大阪ヘルスケアパビリオンの設計は、大屋根リングの基本設計開始の約2ヶ月後から開始されたが、2つのプロジェクトが同事務所内で同時進行することで、お互いの設計状況を確認できることは利点であった。異なるベクトルの未来を創造しやすかった環境とも言えるだろう。

2つの建築が形成する外観を重要視していたため、常に2つのモデルを並べて検討を行っていた。そこで興味深いのは、他のパビリオンのイメージパースでも必ずと言っていいほど大屋根リングとの関係性が描かれていたことである。多数の国や企業が一か所に集まる万博において、大屋根リングは一つの世界を作っていた。万博を通じ、建築単体がもたらすものだけでなく、建築が集まることによって生まれる力を実感した。

武藤 優哉
東畑建築事務所
大阪ヘルスケアパビリオン：
設計・監理担当
大屋根リング：基本設計担当

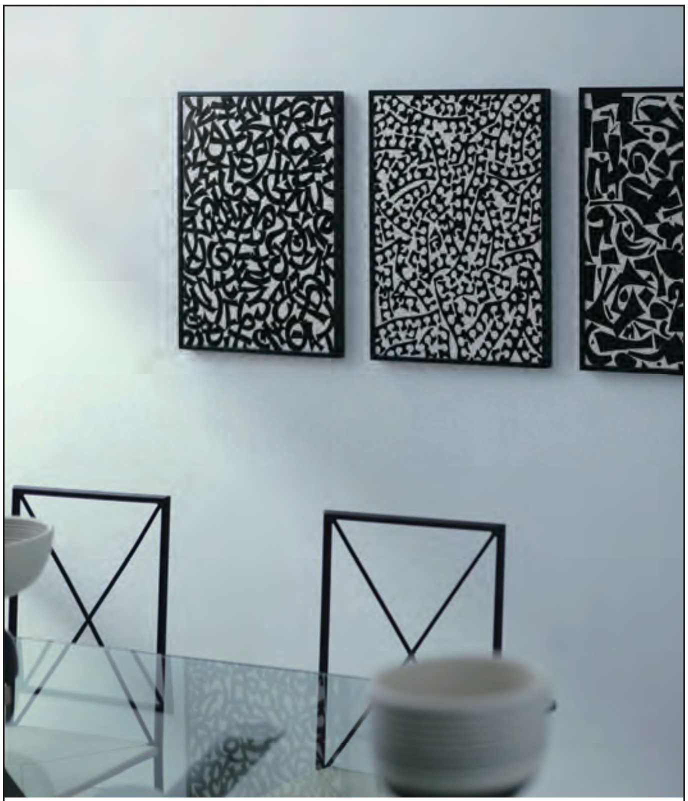
万博が齎したもの

当初、冷ややかな論調が流れていたメディア。懐疑的だった空気を圧倒的な建築力、世界感、そして群衆が一変させた。訪れた人ならば同じ感想を持つだろう。

大屋根リングをはじめて仰いだとき、心を揺さぶる経験したことのない生命的な感覚であった。そして高揚を抑えることができず、すぐに万博会場を俯瞰した。2025mの木造円環。比類なき存在感とともに日本の未来を享受した瞬間であった。万博の経済効果計り知れない。引いては次代を担う人材育成まで波及する。このすべてが未来を支える礎になるかと想うとこれからの日本に期待してやまない。

では、2050 年の日本に想いを馳せてみよう。あれから 25 年、大屋根リングの記憶を呼び起こすと、建築以上の価値が刻まれていたことに気づいた。あの大きな木造円環の下で、ひとつにつながったことは、共生の記憶として今もなおお語り継がれている・・・さてどうか? 55 歳の私から 80 歳の私にも届け!

高木 耕一（JIA愛知）
東畑建築事務所



フジエテキスタイル
fujie textile
showroom TOKYO OSAKA NAGOYA FUKUOKA HIROSHIMA SENDAI SAPPORO

水性厚膜型特殊合成樹脂系塗床材
SKスペシャルフロアー

過酷な環境に対して優れた耐久性を誇る
耐熱性
強靭性
耐薬品性
耐微生物性
安全性が高く低臭
用途
食品工場・厨房等
※SKスペシャルフロアーには
平滑タイプと防滑タイプがあります。

建築仕上材の総合メーカー
SK KAKEN エスケー化研株式会社
名古屋支店：〒451-0044 名古屋市西区菊井2-14-19 TEL:052-561-7712
www.sk-kaken.co.jp

「ARCHITECT」は日本建築家協会（JIA）
東海支部の機関誌です。

会員・協力会員のほか、全国のJIA各支部、東海地方の大学・自治体などに配布されています。

JIA